

ニューズレター

「象徴的大衆行動と日常実践——シアトル以降のキッチンアクティビズムの現場から」(10/3/28)での論議から

□「インフォツアー」で洞爺湖G8サミット反対行動への参加を呼びかける

2010年3月28日(日)、アンラーニング09後半期の第4回として、表記のような学習会を行いました。今回の学習会では、世界各地でのオルタナグローバルイゼーション運動の現場に身を置きながら、国境を越えたアクティビスト同士のつながりを創りだすことを試み続けている、樋口拓朗さんを話し手に迎えました。以下、樋口拓朗さんの話の要旨を紹介します。(なお、以下の「私」は、樋口さん自身を指す)

90年代末から、先進国首脳会議や、WTO総会、環境サミットといった、世界各国の政府の閣僚が参加するような大規模な国際会議が開催される度に、開催国の中だけではなく、世界中から何万・何十万という活動家が押し寄せて大規模な抗議行動を展開するというのが、当たり前のようにになっています。そのような大規模なオルタナグローバルイゼーション運動の、いわば「幕開け」であり、同時に、そういった動きの一つの象徴としてあるのが、99年にアメリカ・シアトルで予定されていたWTO総会を大衆的な直接行動で流会させた「シアトルの乱」です。

「シアトルの乱」では、WTO総会の開催を妨害するために、5万人もの活動家が街頭行動に参加したと言われています。アクションの形態ごとにくつもの「ブロック」に分かれて阻止行動が行われ、街のあちこちで「人間の鎖」が作られました。結局、WTO総会は開会すらできませんでした。その時、シアトルの街では、「大変だ！このままでは、我々が勝ってしまう。いそいで警察を呼べ！」という落書きが壁に書かれていたということですが、実際にその通りになりました。そのような大規模な「象徴的大衆行動」と、運動の日常実践との関係や連続性はどのようなものとしてあるのか。また、そのようなグローバルな運動のローカルな基盤は、どのように成立しているのか。そういった「問い」を軸にすえながら、今日の私の話を進めていきたいと思えます。

先ほど、進行の人からの私の紹介の中で、08年の洞



バルセロナの自由ラジオ“Radio Branco”で
G8・08反対行動への参加を呼びかける

洞爺湖G8サミット反対運動の一環として、私がヨーロッパのいくつもの国で「インフォツアー」を行ったという話がありますが、まず、その「インフォツアー」とは何かということからお話したいと思います。洞爺湖G8サミットの前年の07年には、ドイツ・ハイリゲンダムでG8サミットが行われました。その時には、反G8行動が数万人規模の参加者によって活発に展開されました。その後、07年9月に、ドイツでの反G8サミット闘争の具体的な戦術や、反対行動がどのように取り組まれたのかを日本の運動グループに伝えるために、ドイツでの反G8運動のコーディネーター役を中心的に担ったドイツの活動家が来日しました。そのように、他国での運動経験を共有化した上で、今度は運動経験を引き継いだ側の活動家たちが海外へ出かけて、自国での反対行動への参加の呼びかけを行うというのが、「インフォツアー」です。

洞爺湖G8サミット反対行動への参加を海外の活動家に呼びかけるために、日本の運動グループも、「インフォツアー」を企画しました。08年2月から4月にかけてヨーロッパ15カ国の約40の都市を4人で廻りましたが、その一員として私も参加しました。その後、08年の5月には、マレーシア・シンガポール・インドネシアの東南アジア3カ国の5カ所で「インフォツアー」を行いました。その時には、私一人で廻りました。

□社会運動の基盤・「拠点」としての「ソーシャルセンター」

70年代から、アメリカやヨーロッパの大都市では、放置されている空きビルを若者たちが「自主占拠」して自分たちの自律的なスペースにする「スクウォーティング」運動が盛んに行われていました。占拠された建物はただ、住居として使用されるだけではなく、人々が集まるバーやカフェがあったり、コンサートや自主出版のパンフレット類の刊行、ゲストを迎えてワークショップやミーティングなどが行われたり、共同のキッチンでの食事作りがされたりする場になっています。そのように、自律的に運営されている「ソーシャルセンター」(社会運動センター)が、ヨーロッパ各国の主な都市には、少なくとも1つはあって、活動家たちの重要な「拠点」になっています。

私たちの「インフォツアー」では、ヨーロッパ各地のそういった「ソーシャルセンター」を訪ねて、ぜひ、日本に来て洞爺湖G8サミットに対する反対行動に共に参加してほしいと訴えて廻りました。また、「インフォツアー」では、ヨーロッパではほとんど知られていない、日本の社会的・政治的な状況についても説明しました。その中で、例えば、イラク反戦運動以降、「反戦と抵抗のフェスタ」のような、プレカリアートたちのストリートでの運動が日本でも活発に展開されていることや、労働者の「無権利状態」化に対してフリーター労組が反撃するようになってきていることなどについて報告を行いました。日本のホームレスの人たちについての報告では、「ネットカフェ難民」のことを紹介しました。ヨーロッパの人たちにとっては、そのような狭い空間で生活している人たちが日本にたくさんいるということは大きなショックだったようで、私たちの「インフォツアー」取材した現地のマスコミもそのことを取り上げていました。

残念ながら、「スクウォーティング」運動では、結局は占拠した建物から強制的に排除されてしまうということが珍しくありません。しかし、ソーシャルセンターとして活動しているような所は、それなりに社会的に有益な、文化的・社会的な活



解体前のコペンハーゲンのソーシャルセンター・Ungdomshuset(若者の家)

動を行っているということで、家賃を払っていなくても社会的にある程度は認知されています。イギリスでは約260カ所、イタリアでは約200カ所、ドイツでは更にそれ以上の数のソーシャルセンターが存在しています。

今、皆さんにお見せしているは、デンマークのコペンハーゲンの、Ungdomshuset(若者の家)という、ヨーロッパの「スクウォーティング」運動の象徴的な存在となっている、有名なソーシャルセンターの映像です。しかし、コペンハーゲンでは、「スクウォーティング」運動が盛んに行われてきた一方で、そのような運動に対する保守的な人々の反感も根強くあります。保守派のコペンハーゲン市長の当選後、そこを07年のドイツのG8サミットに対する反対闘争の拠点にさせないということで、市がその建物を買収して、激しい反対運動にも関わらず、市当局はブルドーザーでUngdomshusetのある建物を強引に破壊してしまいました。



コペンハーゲンのソーシャルセンター・
Folkets Hus(民衆の家)

コペンハーゲンには、Folkets Hus(民衆の家)という、3階建ての建物のソーシャルセンターがあります。コペンハーゲンは自転車の街で、住民の約4分の1が日常的に自転車を使用しているそうですが、その1階部分には、「バイクワークショップ」のための場所があります。そこには自転車の部品や工具が置かれていて、無料で自転車の修理ができるようになっています。その2階にはカフェと共同のキッチンがあります。その共同キッチンでは、毎週月曜日と木曜日にコレクティブ・キッチンが開かれていて、みんなでご飯を作って一緒に食べるが行われています。また、3階は、会議室や集会室になっていて、そこはバイオリンなどの楽器の練習ができるスペースとしても使われています。

ドイツのハンブルグでは、元オペラハウスだった建物が占拠されて、ソーシャルセンターになっています。また、オランダのアムステルダムでは、教会の建物をスクウォーティングして、ソーシャルセンターにしています。ドイツのケルンでは、建物ではなく、占拠した空き地にテントを張ったり、トレーラーハウスを置いたりしているソーシャルセンターがあって、そこを追い出されても、すぐに別の場所に移動できるようになっています。

これは、スイスのベルンにあるRittershalleというソーシャルセンターの映像です。この建物は、元は、騎手を養成する学校で、その校舎と寄宿舎、馬小屋を占拠してソーシャルセンターにしているのですが、とても大きな建物です。ベルンも含めたスイスのドイツ語圏では、10万人以上の署名を集めると住民投票を実施できるという条例があるそうです。そのソーシャルセンターでは、これまで3回の住民投票を実施させて、毎回、過半数以上の票を獲得して要求を実現させることに成功しています。一番最近に行われた04年の住民投票では、その建物が老朽化して危険だから改修のための予算をつけることを市に要求しました。その住民投票でも勝って、約3億円ほどの改修費用を市当局に出させることができました。そのように、オートノミストの運動の蓄積があるヨーロッパでは、普通の人たちの意識や運動に対する共感の度合いも、日本と比べて大



スイス・ベルンのソーシャルセンター・
Rittershalle

きな差があるように思います。

ヨーロッパだけではなく、中国でも、ソーシャルセンターをつくらうとする動きがあります。今、お見せしているのは、中国の武漢(ウーハン)という都市で実験的につくられたソーシャルセンターの映像です。画面に、「青年自治実験室」という文字が見えますが、これは建物を占拠するのではなく、家賃を払って建物を借りて運営しているものです。日本と比べてもずっと当局による締め付けが厳しい中国で、このような活動をするのは、とても勇気のある行動だと思います。



中国・武漢のソーシャルセンター・
我門家青年自治実験室

□COP15反対闘争はいかに闘われたのか

私が一番最近に参加した「象徴的大衆行動」は、昨年(2009年)の末にデンマーク・コペンハーゲンで開催された環境サミット(COP15)に対する反対行動ですが、それについて、映像や動画をお見せしながら、少し詳しくお話ししたいと思います。COP15に対する反対行動は、09年の12月11日から15日までの5日間、連日行われました。

環境を破壊するような企業活動を行っていながら、環境保護を「偽装」することを「グリーンウォッシング」と言うようですが、COP15への対抗アクションの初日の12月11日には、そのような企業の商品の不買キャンペーンや、抗議行動が計画されていました。正直言って、「戦術倒れ」の面もあったのではないかと思います。その日は、いくつもの「ブロック」に分かれて、対抗アクションを行うことが予定されていました。例えば、「インサイド・ブロック」というのは「グリーン・ウォッシング」を行っている企業のオフィスに乱入して営業妨害を行うもので、外にいる「アウトサイド・ブロック」は、「インサイド・ブロック」の人たちがすぐに逃げることができるように空間を確保することになっていました。また、「ノイズ・ブロック」はデモ中に太鼓を鳴らすなどして大きな音を出すことになっていましたし、「ビジュアル・ブロック」は、視覚に訴えてアピールするために、街頭で横断幕を広げたり、街に落書きしたりするといったように、それぞれの役割分担が決められていました。

しかし、デモが始まってすぐに警察に規制されて、デモの指揮者がいない状態になってしまい、その日のデモの目的が何であり、デモ隊がどこに向かうのか誰も分からないまま、デモコースとは無関係にデモ隊が進んでいくことになってしまいました。そのような状況でデモ隊が市内の交通機関をストップさせてしまい、結局、交通妨害ということで警察に包囲されて、ほとんど何もできないまま、その日のデモは終わりました。

対抗アクションの2日目の12日には、主催者発表で10万人もの人々がデモに参加しました。この日のデモは5日間の内で最も大きな枠組みのもので、思想的な立場やスタンスを異とする様々な組織やグループが参加していました。その中には、国際的な環境NGO団体や労働組合の他、「ブラックブロック」と呼



COP15反対行動・1日目のデモの「サウンド・ブロック」



COP15反対行動・2日目のデモ

ばれている、黒装束の反資本主義的なグループも加わっていました。反資本主義ブロックは、デモ隊の後方にいましたが、明らかに最初から警察に目をつけられていて、その日のデモでは、千人近い大量逮捕がありました。

COP15では大規模な反対行動が当初から予想されていたことから、それに先だってデンマークでは、「12時間法」という治安維持のための法律がスピード可決されました。これは、公的な秩序を乱す恐れがある人間に対して、12時間以内であれば無条件に逮捕・拘禁することができるという、ひどい法律です。その日は、デモが始まって20分ほどで、何もしない内にすぐに、警察が反資本主義ブロックのデモ隊を一斉に

逮捕し始めました。その中には、単にその近くを通りかかっただけの人もいました。

私自身もその時のデモで逮捕されたのですが、明らかに不当な逮捕だということがはっきりしているので、逮捕されても誰も意気消沈していないんですね。留置場へ移送するバスの中でも、逮捕者たちは、修学旅行のような雰囲気です。ずっと大声で歌を歌い続けていました。コペンハーゲンでは、それまで、当局はこのような大量逮捕を行った経験がないので、COP15に対する反対行動を見越して、ビール工場の地下倉庫などに仮設の留置場が作られました。

そこには、鶏小屋のような金属のオリの留置場がいくつもあって、逮捕されたデモ参加者は十数人ごとに1つの留置場に入れられました。しかし、留置場に収容されても、不当逮捕への抗議のスローガンを5分ごとに大声で唱えたり、留置場内に据え付けられているベンチを引きはがして留置場のオりに打ち付けたりして、デモをそのまま、延長したような血気盛んな雰囲気でした。千人近い逮捕者の内、1人は起訴されましたが、ほぼ全員がその日の内に釈放されました。

3日目のデモでは、グローバルな企業活動の「突端」であるコペンハーゲンの港湾施設を封鎖することが計画されていました。しかし、その日も、大量逮捕が行われて、何のアクションも行えないままに終わってしまいました。

4日目には、「ノー・ボーダーズ」という移民労働者の権利を訴えるグループの主催でデモが行われましたが、そのデモ自体は逮捕者を出すこともなく、無事に終わりました。しかし、その日の夜、反対行動に参加していた活動家たちと警察の間で、激しい攻防戦が繰り広げられました。その翌日が対抗アクションの最終日で、「レクレーム・パワー」というデモが予定されていましたが、その前夜祭のイベントが、コペンハーゲンのクリスチャニアというヒッピーコミュニティのようなソーシャルセンターで行われていました。クリスチャニアは、71年にヒッピー世代の若者たちが、軍事施設をスクワットして始まったソーシャルセンターですが、そこは、COP15への対抗アクションに参加する活動家たちの宿泊所になっていました。そこが警察に包囲されたことから、しばらくは活動家と警察の間で、にらみ合いが続いていました。しかし、警察の突入を阻止するための急ごしらえのバリケード



街頭で「人間の鎖」を作るデモ参加者たち
(COP15反対行動・5日目)

に誰かが火をつけたことから、一挙に攻防戦が始まり、警察が路上で閃光弾やゴム弾、催涙ガスを発射する一方で、活動家たちも火炎瓶で応酬するという状態に突入しました。結局、その日の夜も、大量逮捕が行われました。

対抗アクションの最終日の5日目には、環境サミットの会場を囲むフェンスを乗り越えて、会場の敷地内で「ピープルズ・サミット」を開くことや、環境サミットの会場にいる正規の参加者が、「こんな茶番にはつきあいきれない！」と宣言して退場することなどが予定されていました。また、市当局が、対抗アクションに対して弾圧をしかけてくるのが、当然、予想されたので、新しい「戦術」として「バイク・ブロック」というものが考案されました。それは、15人ぐらいのグループに分かれて、自転車で会場近くまで行き、そこで自転車を並べて通りを封鎖するという計画です。それに向けて、COP15への対抗アクションの始まる何日も前から、コペンハーゲンの路上に捨てられた自転車を大量に拾い集めて、普段、自転車修理のワークショップを行っている「キャンディー・ファクトリー」というソーシャルセンターで修理することが行われました。その作業には、私も一緒に参加しました。

また、「バイク・ブロック」の中には、「サウンド・スワーム」というのを計画したグループもありました。これは、自転車に付けたサウンドシステムのスピーカーから大音響を発して、環境サミットの会議を妨害しようというものです。そのために、2台の自転車をつなぎあわせて、そこにサウンドシステムを設置できるようにしました。しかし、「バイク・ブロック」によるアクションが予定されていた前日に、警察の摘発があり、つなぎ合わせた自転車が「攻撃用」だという理由で、没収されてしまいました。そのために、その夜は、徹夜で、自転車を改造する作業が行なわれました。

「バイク・ブロック」は、最終デモの1週間前から、当日、リーダーの指示に従って機敏に動き回ることができるようにするためのトレーニングを行っていました。しかし、当日は、自転車に乗っているというだけで厳しく規制され、環境サミットの会場近辺の道路も封鎖されて、「バイク・ブロック」はそこに近づくことができないまま、解散せざるを得ませんでした。また、せっかくの「サウンド・スワーム」も、威力を発揮できないままに終わってしまいました。



大音響で環境サミットの会議の妨害を試みる
「サウンド・スワーム」

□「キッチンアクティビズム」の日常実践が大衆行動のベースに

先ほども話に出てきた、Folkets Husやクリスチャニアといったソーシャルセンターは、COP15への対抗アクションに参加した活動家たちが数百人も泊まることのできる宿泊所となっていました。また、コペンハーゲンのソーシャルセンターには、寝袋を持ち込めば、一度に1500人が寝泊まりできる場所もありました。そういったコペンハーゲン市内のソーシャルセンターが、COP15への対抗アクションのような大規模な大衆行動が成立するための重要な「インフラ」として、機能していました。

Folkets Husのカフェは、COP15への対抗アクションの期間中、必要な情報が入手できるよう、インターネットが無料で利用できる場所として開放されていました。また、その2階は、予定表に記入すれば誰でも空いている時間帯に無料で利用できるミーティングスペースになっていましたし、3階は、デモで使用する旗や横断幕を作ることができる作業場になっていました。コペンハーゲンの「ドリーフセット」というインフォショップは、普段は自主制作のCDや、自主出版の書籍類の販売を行っている

店なのですが、COP15への対抗アクションの期間中は、そこがメディアセンターになっていました。そこには、高性能のパソコンがいくつも設置されていて、活動家たちが日中のデモで撮影した映像をそこで自由に編集して、その日の夜には動画としてインターネット上で配信できるようになっていました。

COP15への対抗アクションにはおよそ10万人もの人たちが参加したのですが、10万人全員とは言わないまでも、非常に多くの人たちが、COP15対抗アクションの期間中、コペンハーゲンでの宿泊場所と併せて、食事を取れる所を必要とするわけです。そのため

に、コペンハーゲンのソーシャルセンターでは、8カ所の「マス・フィーディング」(大規模な炊き出し)の場所が設置されました。そこには、ヨーロッパの5つの有名なマス・フィーディングのグループが参加しました。それらのグループは、対抗アクションの始まる3週間前から現地入りして、「財布」を共有しながら、地元の農家との協力で食材を確保しました。そのために、約5万ユーロのお金が使われましたが、そのお金は食事を食べた活動家からのカンパでまかなわれました。「スライディング・スケール」と言いますが、例えば、このような場合には、2ユーロから5ユーロまでというように、大体、これぐらいは払って欲しいという金額を設定した上で、懐具合に応じて各自が払える範囲で食事代を出す方式が取られています。

一度に何百人、何千人分の食事を作るわけですので、炊事のための道具も市販のものでは間に合わず、手作りで制作されています。この映像は、ベルリンを拠点にしている「フード・フォア・アクション」というマス・フィーディングのグループが使用している鍋で、一度に千人分のスープを作ることができます。これは、2つのワイン用の貯蔵樽をくっつけて1つの大鍋にして取っ手をつけたものです。このグループは、週末のデモの度に、デモの主催者に呼ばれて、数百人から数千人分のデモ参加者のための食事を作るという活動をしています。

これは、「ランペンプラン」というアムステルダムの子グループが所有している移動キッチンのためのトラックです。そこでは25年前からこのような活動を行っていて、最大で2500人分の食事をいつでも提供することが可能なスキルと経験をもっています。このグループは、普段、アムステルダムのあるソーシャルセンターで、毎週月曜日と木曜日にコレクティブ・キッチンを開いて、100人ぐらいの人たちに食事を提供することをしています。そうしたマス・フィーディングのグループの長年の経験の蓄積の上に立って、今回のような大衆行動のための大規模な炊き出しを行うための体制ができています。

これは、Folkets Husのコレクティブ・キッチンで出された食事の映像です。そこでは、ベジタリアンフードよりも更に厳格に、卵や乳製品も含めて一切の動物性タンパク質の食品を使わない「ビーガン」料理が出されています。なぜ、ビーガン料理家というと、宗教的な理由でも、健康上の理由でも、とにかくこの料理は食べることができないということがなくて、文化や宗教の違いに左右されない料理なのです。それでは、そこで使われる食材はどうやって調達するかというと、「ダンプスター・ダイビング」、つまり、「ゴミ箱あさり」をするわけです。これは、ロンドンのある大型スーパーマーケットの閉店後のゴミ置き場の映像ですが、そこに、長年、「ダンプスター・ダイビング」をやっている人と一緒に私も夜中に潜入しました。そこにはカギがかけられていますが、そのカギには一見分からないような細工が施してあって、簡単に開けられるようになっています。そのゴミ箱を開けて、手で触って柔らかいか固いかで腐敗の具合を確かめながら、大丈夫だと思うものを選んで、大きなボストンバッグ一杯に



Folkets Husでのマス・フィーディング

詰め込んで持ち帰るわけです。

パンなどは近所のパン屋さんに前もって電話で頼んでおけば、古くなって捨てるようなパンをタダで分けてもらえます。特に、キリスト教圏の国では、パンを捨てることに対する抵抗感が強くあって、わりあいスムーズに古いパンを分けてもらえます。**Folkets Hus**の向かいにあるパン屋さんは、そこで月曜日と木曜日にコレクティブ・キッチンが開かれるということを知っていて、その曜日になると大きなカバンに古くなったパンをつめて待っていてくれるので、それを受け取りに行くようになっています。

コレクティブ・キッチンはただ、単に安く食事ができるというだけの場所ではなく、そこに行けば知っている人に会えるという社交の場にもなっています。そのような場がこれからも続いて欲しいという人々の思いが、そこでのコレクティブ・キッチンが維持される原動力になっているように思います。水曜日には、また別のソーシャルセンターでコレクティブ・キッチンが開かれていますし、火曜日には**Folkets Hus**の向かいの公園でコレクティブ・キッチンが開かれまています。ですから、コペンハーゲンでは、毎週月曜日から木曜日まで、いずれかの場所でコレクティブ・キッチンが開かれて、食事をみんなで作って食べるが行われていることとなります。ベルリンには活動家の情報紙があるのですが、それを見ると、ベルリンでは、毎日どこかでコレクティブ・キッチンがあるどころか、同じ曜日に複数のコレクティブ・キッチンが開かれているようです。



**Folkets Husのコレクティブ・キッチン
での食事風景**

G8サミットに対する反対行動や、COP15への対抗アクションといった「象徴的大衆行動」を見れば分かるように、そうした大規模な反対行動と、キッチンアクティビズムといったソーシャルセンターでの日常的な実践との連続性がきちんと確保されていて、決して一過性のものではないんですね。「象徴的大衆行動」を支えるための宿泊場所や、運動情報センター、マス・フィーディングのキッチンといった「インフラ」を見てみると、「生」を維持するために最低限、必要な仕組みがそこにちゃんと集まっています、しかもそれが、現在の資本主義的なあり方とは違うような仕方で運営されているわけです。つまり、「今のようではない世界」というものが、そこにはすでに幾分かは、表現されているように思います。そこに注目することが、「もう1つの世界」へのカギを、この国を生きる自分の日常から探るための、一つの手がかりになるのではないかと感じています。

私が海外に出かける際には、活動家のネットワークで、いろんな所で泊めさせてもらったり、食事を食べさせてもらったりしているわけです。しかし、そのような活動家のネットワークや「インフラ」というものが、日本にはほとんどありません。08年に、洞爺湖G8サミットへの対抗アクションに参加するために、海外の活動家がたくさん来日したのですが、その人たちの寝場所を確保するために非常に苦労しました。そのような思いから、最近、「東京アクティビスト・ゲストハウス」というものを実験的に始めました。とは言っても、自分のアパートをゲストハウスとして開放して、そう名付けているだけの話なのですが。それでも、友人から紹介されたということで、これまで30人ぐらいの海外の活動家の人たちが泊まりに来ていますので、そういった需要は予想以上に多いのではないかと感じています。ささやかな試みではありますが、案外、そのようなことが、自分の日常と「象徴的大衆行動」とをどう接続させるのかを考えるための、一つの糸口になるのではないかと考えています。